

住生活とごみのかかわりに関する研究 第3報 死蔵品の実態とその問題点

日女大家政 沖田富美子

研究の目的 ごみの問題について、ここ数年あらゆる側面から追究を試みてきた。昨年の発表において示したように、一般生活者のリサイクル活動の必要性、重要性の認識は高いが、実際の活動と言う面ではまだ多くの問題がある。そこでいずれはごみとなるものの活用方法を検討するために、住宅内で死蔵されているものの実態（地域による違いも含む）を把握し、そこに生じている問題点を探ることが本研究の目的である。

なおこの研究にあたっては、すでに関西地域を対象に1989年に行われた研究結果を参考としている（家庭における死蔵品の有効利用に関するシステムの研究 一棟氏）。

研究の方法 関東地域の一女子大学の学生を対象に、1993年7月アンケート用紙による記入調査と死蔵品のおかれている場所の平面図採取をおこなった。有効回収件数は97件である。なお死蔵品の定義については、発表時に示す。

研究の結果 調査対象家庭が大学生のいる家族であるため、属性及び住宅の傾向は既研究の調査対象とほぼ同じである。調査対象の90.7%の家庭でなんらかの死蔵品及び死蔵品となるものを所有している。なお関西地域の家庭よりも、関東地域の家庭に使うあてはないが、処分するには惜しいものあるいは処分したいが置いてあるとする割合が多く、死蔵品の平均所有数も大きい。死蔵品となっているもの、これら死蔵品となっているものの購入方法（自分で購入したものが多く、もらいものによる所有は約3割）、死蔵品となっている理由（使うチャンスがない、もったいない、適切な方法が見つからない等）、死蔵品の活用方法（知人・友人にあげる、バザーに寄贈、廃品回収）については同様の傾向にある。